ISSN 2186 − 3989

高校と大学での居場所感が大学生の主観的幸福感に及ぼす影響

小島　弥生

The Effect of a Sense of ‘Ibasho’ at Highschool and at University on Subjective Well-being in Students

Yayoi Kojima

北　陸　大　学　紀　要
第54号（2023年3月）抜刷

北陸大学紀要
第 54 号（2022 年度）
pp.221 ～ 236
［原著論文］

高校と大学での居場所感が大学生の主観的幸福感に及ぼす影響

小島　弥生*

The Effect of a Sense of ‘Ibasho’ at Highschool and at University on Subjective Well-being in Students

Yayoi Kojima*

Received November 30, 2022
Accepted January 5, 2023

Abstract

This study consisted of two surveys of university students to examine how their sense of 'Ibasho' in high school and in university would affect their subjective well-being and sense of adjustment to their current situation. The two hypotheses were that those with a high sense of 'Ibasho' at university would have a high subjective well-being and adjustment (Hypothesis 1), and those with a low sense of 'Ibasho' at university but a high sense of 'Ibasho' at high school would have a high subjective well-being and adjustment (Hypothesis 2). Hypothesis 1 was supported, while Hypothesis 2 was only partially supported. Because the scale of a sense of 'Ibasho' used in this study had a different factor structure from the scales in previous studies, a reconsideration that corrects this difference would be desirable.

Key Words： a sense of ‘Ibasho’, subjective well-being, university students

要約

大学生を対象に 2 つの調査を実施し、大学での居場所感や高校での居場所感が大学生の主観的幸福感や現状に適応できている感覚にどのような影響を及ぼすかを検討した。仮説は、大学での居場所感が高い者は主観的幸福感や適応感が高いだろう（仮説 1）、大学での居場所感が低くても高校での居場所感が高い者は主観的幸福感や適応感が高いだろう（仮説 2）の 2 つであった。仮説 1 は支持されたが、仮説 2 は部分的にしか支持されなかった。独自に作成している居場所感尺度が先行研究とは異なる因子構造をしていることから、これらを是正した再検討の必要があることを議論した。

キーワード： 居場所感、主観的幸福感、大学生

* 北陸大学国際コミュニケーション学部　Faculty of International Communication, Hokuriku University

問題と目的

石本(2010)によると「居場所」とは、辞書的には物理的な空間を指す語であるが、1980年ごろから学校不適応の問題が社会的に広く認知されるようになるとともに、心理的な意味を表す語としても使用されるようになっている。一例として、文部省が 1992 年に取りまとめた「学校不適応対策調査研究協力者会議」の報告書（登校拒否（不登校）問題について：児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して）が挙げられる。この報告書では、学校が子どもにとって自己の存在感を実感でき精神的に安心できる場所、つまり、「心の居場所」となることが重要であると指摘している。そして、石本は主に教育臨床や心理臨床の領域での「居場所」や「居場所感」を扱った先行研究の知見を整理したうえで、「居場所感」を「（自分が）ありのままでいられること」と「（自分が）役に立っていると思えること」の 2 因子でとらえる居場所感尺度を作成している。これは、「居場所」を「自分が肯定的にとらえることのできる対人関係」と定義することで、個人のもつ複数の対人関係のそれぞれの質によって居場所であると感じる程度、つまり、「居場所感」を測定することを試みている。居場所感を日常生活で個人が関係する複数の対人関係ごとに測定することで、例えば、家族との関係を居場所であると感じることができても、学校での友人関係は居場所であると感じられないというケース等で、各居場所感が心理的適応や学校適応に対して与える影響を検討できるとしている。

大学での居場所感、つまり、大学で自分が関わる他者から自分が受け入れられていて自分らしくいられる感覚や役に立っている感覚は、大学に入学した時点から大学内で関わるさまざまな他者との対人関係、とりわけ、友人関係の中で醸成されるはずである。しかし、2020 年度の始まりにあたり、日本の大学生は大学での居場所感を抱きにくい状況におかれてしまった。すなわち、COVID-19 の感染拡大を防止するための大学への入構禁止措置や対面授業の停止、そして、遠隔授業の実施である。2019 年末にその存在が発覚し、2020 年以降、国際的に人々の生活や行動に多大な影響を及ぼした COVID-19 によるパンデミックの発生は、日本の大学生にも未曾有の事態への対応を強制的に迫ることになった。

伊藤・栗本・白水(2021)は 2020 年 4～5 月時点に緊急調査を実施し、心身のストレス反応や大学生活に対する意識、調査時点での「心配なこと、困っていること」を尋ねている。この調査では、入学以降一度も大学構内に入ることなく遠隔授業への対応を余儀なくされた大学 1 年生と、前年度までは通常の大学生活を送っていた大学 2 年生以上の学部学生、大学院生との比較を行っている。そして、大学 1 年生が 2 年生以上の学生よりも大学生活への不安感や大学へ行きたいという希望が強いこと、遠隔授業への評価が低いことを報告している。一方で、大学 1 年生はその他の群との間にストレス反応の差はなく、むしろ、ストレス反応のうちの無気力については 2～4 年生のほうが 1 年生よりも強いことも示している。さらに、学年間の違いは検討していないものの、心配なことや困っていることとして挙げられた項目は、回答者数の多い順に、学業、将来、健康となり、これに続いて、「大学が始まること」や「友人との接点がないこと」を挙げている者が一定数いたことを明らかにしている。

伊藤他(2021)の調査結果を概観すると、以下の 2 点が推察できるだろう。第一に、大学 1 年生にとって大学での友人関係を構築する間もなく遠隔授業による学業への従事を大学生活の中心に置かざるを得ない状況で、大学での居場所感を持ちづらいことを示唆するとともに、大学での居場所感が弱いことが必ずしも心理的に悪影響になるとは限らないことである。石本(2010)が示しているように、人は複数の対人関係で居場所感を構築し得るため、大学での居場所感が形成しづらい状況下でも、それ以外の対人関係のなかで一定の居

場所感が保持されていれば心理的にダメージを受けづらい可能性が考えられる。第二に、COVID-19 によるパンデミック発生以前の大学生活の中で、大学での居場所感が形成できていない大学生や、大学生活そのものに無気力な気持ちを抱いている大学生が一定数いた可能性である。特に、心配ごととして「大学が始まること」を挙げている大学生が一定数いることについて、伊藤他はそれが COVID-19 への感染に対する不安による心配であるか、もともと抱いている大学不適応や友人関係への不安かは判別できないと述べている。つまり、大学での居場所感が低いまま大学生活を送っていた大学生も一部には存在していて、その場合には遠隔授業を中心とした通常とは異なる大学との関わり方に、満足とまではいかないものの、一種の幸福感を感じていた可能性が考えられる。

本研究では伊藤他(2021)の知見をふまえ、以下の 2 つの仮説について検討を試みる。仮説 1 は「大学での居場所感が高い者は、居場所感が低い者に比べ、主観的幸福感および適応感が高いだろう」とする。大学における対人関係、特に友人関係の中で、自分自身が本来の自分でいられ、友人の役に立っているという感覚がもてる場合は、そのような感覚が持てない場合と比べて、率直に幸せを感じ、また、現状に適応できていると感じられると思われる。そして、石本(2010)や伊藤他(2021)の知見を考慮し、仮説 2 として「大学での居場所感が低い者であっても、高校での居場所感が高かった場合には、主観的幸福感および適応感が高くなるだろう」という仮説を立てる。大学での友人関係に居場所を見出すことが難しい人であっても、直近の同世代の友人関係である高校での友人関係の中に居場所を感じることができていれば、精神的には幸せの気持ちや現状に適応できている感覚を抱きやすい可能性が考えられる。特に、大学生活において制約の多かった 2020 年度に大学に入学した大学生や、対面授業が再開されてもサークル活動等の制約が続いている中で大学生活を送っている大学生にとって、大学での居場所感だけではなく、高校で構築された居場所感が現在の生活における幸福感や適応感に寄与している可能性も高いと思われる。

調査 1 [1]

方法

調査対象者と調査時期　それぞれ東京都、千葉県、埼玉県、および、石川県にキャンパスのある 4 か所の 4 年制大学において、心理学関連の授業を担当している教員に依頼し、授業の履修学生に Web 調査への参加協力を依頼した。一部の授業では調査への参加協力を授業評価の一部に組み入れる措置をとったが、基本的にボランティアでの参加協力を求めた。学生たちには事前に調査への参加は自由意志に基づくこと、参加しないことにより不利益はないこと（授業評価へ組み入れる措置をとった授業でもボーナス点の扱いで通常評価の範囲外での対応であった）、個人を特定するような情報の収集は行わないこと、調査に参加しても途中で離脱することが可能なこと、また、最後まで参加協力をした場合でも最終的に回答内容をデータとして利用することを許可するかどうかは参加者の自由意志にゆだねられることを、参加協力を呼び掛けた際に口頭で伝えるとともに Web 調査の冒頭と最後にも文章で明示していた。2021 年 10 月 6 日～27 日の 3 週間を調査期間とし、206 名の参加協力が得られた。

調査項目　Web 調査に用いた調査フォームは以下の 5 つのセクションから構成されていた。

冒頭のセクションでは調査参加者に関するデモグラフィック変数として、性別、年齢、学年、現住所のある都道府県の 4 項目への回答を求めた。性別は「男」、「女」、「どちらでもない」、「答えたくない」の 4 つの選択肢から 1 つを選ぶ形で答えことを求めた。年齢は

回答時の実年齢を数値で回答することを、学年は「大学 1 年生」、「大学 2 年生」、「大学 3 年生」、「大学 4 年生」、「大学 5 年生以上」の 5 つの選択肢から 1 つを選ぶことを求めた。現住所の都道府県名はフォームの入力欄に都道府県名を直接入力することを求めた。

第 2 セクションでは調査参加者の「高校時代」の居場所の有無および居場所感について尋ねた。居場所の有無については「部活動の参加」、「クラス内で気軽に話せる友人の存在」、「特定の友人集団・友人グループのメンバーであったという自覚」の 3 項目で高校生であった時に居場所を持っていたかを尋ねた。「部活動の参加」は「参加していた」、「参加していなかった」の 2 つの選択肢から 1 つを選ぶ形で回答させた。「クラス内で気軽に話せる友人の存在」は「いた」、「いなかった」の 2 つの選択肢から 1 つを選ぶ形で回答させた。「特定の友人集団・友人グループのメンバーであったという自覚」は「自分が特定の集団・グループのメンバーであると自覚していた」、「特定の集団・グループのメンバーではなかった」の 2 つの選択肢から 1 つを選ぶ形で回答させた。

居場所感については Table 1 に示した 8 つの項目についてリッカート法（4 件法）での回答を求めた。これらの項目は石本(2010)の居場所感尺度や則定(2016)の心理的居場所感尺度を参照して、本研究で独自に作成したものであった。4 件法は「1.当てはまらない」、「2.あまり当てはまらない」、「3.やや当てはまる」、「4.当てはまる」で構成していた。

Table 1

本研究で用いた居場所感尺度の項目内容

（文言の異なる箇所は〔高校／大学〕の順に表示）

1	〔高校時代の／大学の〕友人の中に，自分のことを深く理解してくれる人が〔いた／いる〕
2	〔高校時代の自分は，／大学の〕友人の前で「ありのままの自分」を出せて〔いた／いる〕
3	〔高校時代，／大学で〕数人が集まって話しているところに，自分も気軽に参加して話に加わって〔いた／いる〕
4	自分が何かに失敗したときに，率直に，ほかの人に謝ることができて〔いた／いる〕
5	周囲で対人的なトラブルが発生したときに，自分はうまく対処できて〔いた／いる〕
6	〔高校時代／大学での友人関係で〕，少し嫌なところがあったとしても，付き合い続けることができる友人が〔いた／いる〕
7	〔高校時代／大学での現在の生活で〕，自分は安心して過ごせて〔いた／いる〕
8	〔高校／大学〕では，周りの人たちが自分とは違った考えを持っていた場合でも，うまくやって〔いた／いる〕

注)数字は項目の提示順を示す

第 3 セクションでは調査参加者が「大学生になってから」の居場所の有無および居場所感を尋ねた。居場所の有無については「気軽に話せる友人の存在」、「高校時代の友人との連絡の有無」、「大学での部活動・サークルへの所属の有無」の 3 項目で尋ねた。「気軽に話せる友人の存在」は「いる」、「いない」の 2 つの選択肢から 1 つを選ぶ形で回答を求めた。「高校時代の友人との連絡の有無」は「取っている」、「取っていない」の 2 つの選択肢から 1 つを選ばせた。「大学での部活動・サークルへの所属の有無」は「所属している」、「所属していた時期もあるが、今は所属していない」、「所属していない」の 3 つの選択肢から 1 つを選ばせた。

居場所感については「高校時代」と同様の 8 項目・4 件法で回答を求めた。なお、各項

目の語尾を「いた」から「いる」に変え、「高校時代」や「高校」を「大学」に表現を変えて用いた（Table 1）。

さらに、このセクションでは高校の友人と大学の友人を比較する形で「コミュニケーションの多さ」と「落ち着く程度」を尋ねた。この 2 項目では、回答選択肢を「高校の友人のほうが･･･」､「大学の友人のほうが･･･」､「どちらとも(どちらの友人とも)同じくらい･･･」の 3 つとし、自分に該当する 1 つの選択肢を選ぶように求めた。

第 4 セクションでは「あなたが毎日の生活のなかで、どのように感じているかをうかがいます。」という教示文のもと、主観的幸福感尺度（伊藤・相良・池田・川浦, 2003）の 12 項目と、平石(1990)の自己意識尺度のうち「健康－対他者尺度」と「不健康－対他者尺度」の項目を参考に本研究で独自に作成した、大学での適応感を測定するための 9 つの質問項目（内容は後述 ; Table 2 に示した）について、それぞれ 4 件法で回答を求めた。なお、主観的幸福感尺度は項目によって回答選択肢の表現が異なっているが、原尺度のまま、それぞれの表現を用いた。独自に作成した 9 項目については居場所感尺度と同様の 4 件法（1.当てはまらない～4.当てはまる）で回答を求めた。

最終セクションでは、ここまでの回答内容を本研究の分析データとして使用することに対する許諾の確認を求める質問項目と、希望者に対して調査の結果報告書を送るためのメールアドレス（任意回答）、および、調査に対する意見や感想の記述欄（任意回答）から構成されていた。

結果と考察

分析対象者　Web 調査への参加者 206 名のうちデータの使用許諾が得られた 201 名が分析対象者となった。性別の内訳は、男性 89 名（44.3%）、女性 107 名（53.2%）で、「どちらでもない」3 名（1.5%）と「答えたくない」2 名（1.0%）になった。201 名の平均年齢は 19.8 歳（*SD*=1.32）となり、学年分布は大学 1 年生が 63 名（31.3%）、2 年生が 85 名（42.3%）と COVID-19 流行の影響を受けた 2020 年度以降に大学に入学したと考えられる者が全体の 7 割以上を占めていた。そして、3 年生が 45 名（22.4%）、4 年生が 6 名（3.0%）、5 年生以上が 2 名（1.0%）であった。ただし、学年と現住所の都道府県とに関連がみられ、1 年生は石川県が 53 名（63 名の 84.1%）となり、その他も北陸や中部地方の県が回答されていた。一方、2 年生以上の学生は関東や東北地方の複数の都県にまたがり、北陸・中部地方の者はいなかった。

従属変数の整理　主観的幸福感尺度 12 項目について、内的一貫性を確認するために主成分分析を実施した。その結果、第 2 主成分まで抽出されたが、すべての項目が第 1 主成分の成分負荷量が高く、1 つの成分にまとめられると判断した。そこで、12 項目の評定値を単純集計（逆転項目は値を反転させて集計）して主観的幸福感得点（得点範囲は 12-48）とした。なお、12 項目の信頼性係数は α =.87 であった。

次に、適応感を測定するために本研究独自に作成した 9 項目について、因子分析（最尤法・バリマックス回転）を実施した。その結果、Table 2 に示したように 2 因子構造となった。項目内容をふまえ、第 1 因子を「対人適応感」、第 2 因子を「自他尊重感」と命名し、それぞれ因子負荷量の高い項目（対人適応感 6 項目、自他尊重感 3 項目）の評定値を用いて得点化した。命名している内容に沿うように逆転項目の評定値を反転させた上で、評定値を単純集計して対人適応感得点（得点範囲は 6-24）、自他尊重感得点（同 3-12）とした。自他尊重感の信頼性係数が α =.65 と低かったが、そのまま分析に用いることとした。

Table 2
適応感9項目の因子分析（最尤法・バリマックス回転）の結果

質問項目（数字は項目の提示順序。Rは逆転項目）		因子 1 対人適応感	因子 2 自他尊重感	共通性
5R	他人との間に壁を作っている	**.799**	.175	.669
9R	集団生活の中では緊張してしまい，気持ちが張り詰めてしまう	**.765**	-.008	.585
4R	他人と打ち解けて話せない	**.747**	.211	.603
8R	気を遣いすぎて気疲れする	**.631**	-.043	.400
6R	他人に対して好意的になれない	**.591**	.220	.397
7R	人前で話すときは極度に緊張してしまう	**.575**	.018	.331
3	ちょっとした意見が分かれた場合があっても，友だちは友達だと受け入れられる	.026	**.692**	.479
2	ただ一緒にいるだけでも，ありのままの自分でいられる人がいる	.130	**.624**	.406
1	他人をありのままに認めることができる	.047	**.551**	.306
	因子負荷量の２乗和	2.880	1.297	
	寄与率（%）	32.00	14.41	
	累積寄与率（%）	32.00	46.41	
	信頼性係数（α）	.845	.649	

居場所感尺度　本研究で独自に作成した８項目について、高校、大学ごとに主成分分析で分析したところ、ともに第１主成分までしか抽出されなかった。そこで、高校時代８項目の評定値の単純集計を「高校居場所感得点」、大学８項目の評定値の単純集計を「大学居場所感得点」とした。得点範囲は両得点とも 8-32 点であった。

それぞれの居場所感の妥当性を確認するために、部活動やサークルへの参加の有無、友人の有無、等、いくつかの項目の群間で居場所感得点の平均値に統計的な有意差があるかを調べた。その結果を Table 3 と Table 4 にまとめた。

Table 3

高校・大学の交友関係と各居場所感との関係（平均値の *t* 検定）

			高校居場所感		大学居場所感	
		n	*M*	*SD*	*M*	*SD*
高校	参加していた	169	25.7	4.33	23.6	5.13
部活動	参加していなかった	32	24.1	5.85	21.1	6.48
t 値（高校*df*=37.7）			1.52		2.41 *	
高校	いた	189	26.0	4.22	23.3	5.43
クラス友人	いなかった	12	17.6	3.50	20.8	5.03
	t 値		6.74 **		1.59	
高校	メンバーであると自覚	168	26.2	4.26	23.6	5.43
メンバーシップ	メンバーではなかった	33	21.7	4.63	20.8	4.87
	t 値		5.50 **		2.71 **	
大学	いる	174	25.8	4.53	24.2	4.80
友人	いない	27	23.4	4.80	16.1	3.80
	t 値		2.58 *		8.36 **	
高校友人との	取っている	184	26.1	4.20	23.5	5.26
連絡	取っていない	17	19.2	4.55	19.1	5.61
	t 値		6.36 **		3.33 **	

** $p<.01$ * $p<.05$

注）表中に表記のない *t* 値の自由度は*df*=199

Table 4

高校・大学の交友関係と各居場所感との関係（１元配置分散分析）

			高校居場所感		大学居場所感	
		n	*M*	*SD*	*M*	*SD*
大学	1　所属している	97	26.3	4.37	24.6	4.68
サークル参加	2　今は所属していない	22	24.6	4.85	22.0	4.66
	3　所属していない	82	24.7	4.74	21.7	5.99
	*F*値		3.18 *		7.61 **	
	多重比較		1 > 3 (*p*=.062)		1 > 3	
コミュニケーション	1　高校の友人のほう	101	26.6	4.22	21.0	5.25
(高校と大学の比較)	2　どちらとも同じくらい	51	25.3	4.89	24.6	5.16
	3　大学の友人のほう	49	23.3	4.41	26.1	4.12
	*F*値		9.46 **		19.93 **	
	多重比較		1 > 3		1 < 2, 1 < 3	
落ち着く程度	1　高校の友人のほう	126	26.5	4.16	21.6	5.28
(高校と大学の比較)	2　どちらとも同じくらい	51	25.1	4.88	25.6	4.95
	3　大学の友人のほう	24	21.0	3.76	26.2	3.86
	*F*値		16.30 **		16.35 **	
	多重比較		1 > 3, 2 > 3		1 < 2, 1 < 3	

** $p<.01$ * $p<.05$

注）*F*値の自由度は*df*1=2, *df*2=198

高校居場所感の平均値は、高校での部活動の参加の有無では統計的に有意差がみられなかったものの、クラスの友人の有無やメンバーシップの自覚の有無ではそれぞれ有群のほうが高校居場所感の平均値が高かった（Table 3）。また、高校友人との連絡の有無で比較した場合も、有群のほうが高校居場所感の平均値が高かった（Table 3）。そして、高校と大学でコミュニケーションや落ち着く程度を比較させた場合に「高校の友人のほう」がコミュニケーションはとれている、あるいは、落ち着くと回答している群のほうが高校居場所感の平均値が有意に高かった（Table 4）。

大学居場所感の平均値は、大学でサークルに所属しているほうが所属していない場合よりも高かった（Table 4）。また、大学での友人がいる場合のほうがいない場合よりも平均値が有意に高かった（Table 3）。そして、高校と大学でコミュニケーションや落ち着く程度を比較させた場合に「大学の友人のほう」がコミュニケーションはとれている、あるいは、落ち着くと回答している群のほうが大学居場所感の平均値が有意に高かった（Table 4）。

以上の結果から、本研究で作成した高校居場所感、大学居場所感の尺度得点がいずれも妥当性があるものと判断し、次の分析に用いることとした。

階層的重回帰分析　高校居場所感と大学居場所感が従属変数（主観的幸福感、対人適応感、自他尊重感）にどのように影響を及ぼすか検討するために、2 つの居場所感と性別（ダミー変数；男性 1, 女性 0）、学年（連続変数）を説明変数として投入する階層的重回帰分析を実施した。

分析を実施する前に、分析に用いる各変数の相関係数を算出した（Table 5）。

Table 5

階層的重回帰分析に用いる各変数の相関

	1	2	3	4	5	6
1 性別(男性1,女性0)	—					
2 学年	.311 **	—				
3 高校居場所感	-.100	-.156 *	—			
4 大学居場所感	.060	-.036	.373 **	—		
5 主観的幸福感	.120 †	.031	.204 **	.385 **	—	
6 対人適応感	.190 **	.027	.207 **	.270 **	.461 **	—
7 自他尊重感	-.155 *	.006	.442 **	.362 **	.228 **	.191 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .1$

学年以外の説明変数は、従属変数との間に弱い～中程度の相関がみられた。性別と自他尊重感以外は正の相関がみられていた。また、説明変数同士では、性別と学年との間に弱い正の相関があり、男性のほうが高学年の回答者が相対的に多かった。そして、学年と高校居場所感の間に弱い負の相関が、高校居場所感と大学居場所感の間に弱い正の相関がみられた。低学年ほど高校居場所感が強いこと、および、高校居場所感が強い者は大学居場所感も強いことが示唆された。

階層的重回帰分析において、step1 は各説明変数の主効果を投入し、step2 では主効果と 1 次の交互作用まで投入した。step3 では主効果から 2 次の交互作用まで投入し、step4 ですべての主効果、交互作用を投入した。重相関係数の変化量の有意性を基に分析結果を判断し、主観的幸福感と対人適応感については step3 の結果を、自他尊重感については step2 の結果を採用することとした（Table 6）。なお、多重共線性を確認したところ、いずれの

分析のいずれの説明変数においても結果の解釈には問題ないと判断した。

Table 6
階層的重回帰分析の結果

	主観的幸福感			対人適応感			自他尊重感	
	step1	step2	step3	step1	step2	step3	step1	step2
説明変数（主効果と交互作用項）	β	β	β	β	β	β	β	β
性別（男性=1，女性=0）	.100	.083	.041	.193 **	.183 *	.144 †	-.173 **	-.135 *
学年	.026	.027	.097	-.002	.021	.075	.123 †	.100
高校居場所感	.089	.072	.012	.150 *	.134 †	.092	.353 **	.328 **
大学居場所感	.346 **	.399 **	.457 **	.202 **	.233 **	.297 **	.245 **	.212 **
性別×学年		-.137 *	-.074		-.012	.058		.010
性別×高校居場所感		-.047	-.027		-.134 †	-.114		.025
性別×大学居場所感		.028	.035		.114	.104		.095
学年×高校居場所感		.030	-.032		.075	.059		-.084
学年×大学居場所感		.075	.050		-.081	-.098		-.116
高校居場所感×大学居場所感		.028	-.063		.100	.047		-.113 †
性別×学年×高校居場所感			.239 *			.161 †		
性別×学年×大学居場所感			-.129			-.181 *		
性別×高校居場所感×大学居場所感			.192 *			.141 †		
学年×高校居場所感×大学居場所感			-.060			-.075		
R^2	.164 **	.195 **	.253 **	.122 **	.146 **	.184 **	.272 **	.327 **
ΔR^2		.031	.058 **		.024	.038 †		.055 **

** p<.01 * p<.05 † p<.1

すべての従属変数において、大学居場所感の主効果が有意であった。この主効果が示すことは、大学居場所感得点が高い人ほど、主観的幸福感や対人適応感、自他尊重感の各得点が高いということであった。したがって、階層的重回帰分析ではすべての従属変数において仮説 1 を支持する結果が得られたといえる。

主観的幸福感に関する階層的重回帰分析では、性別×学年×高校居場所感の交互作用と、性別×高校居場所感×大学居場所感の交互作用が有意となった。このうち、性別×高校居場所感×大学居場所感の交互作用（β =.19, p<.05）について、単純傾斜分析の結果、Figure 1 に示したように、女性に限り大学居場所感が低い場合に高校居場所感の高低で主観的幸福感の推定平均値に有意傾向の差がみられたため、仮説 2 が部分的に支持された。大学居場所感が低くても高校居場所感が高い場合には主観的幸福感は相対的に高かった。

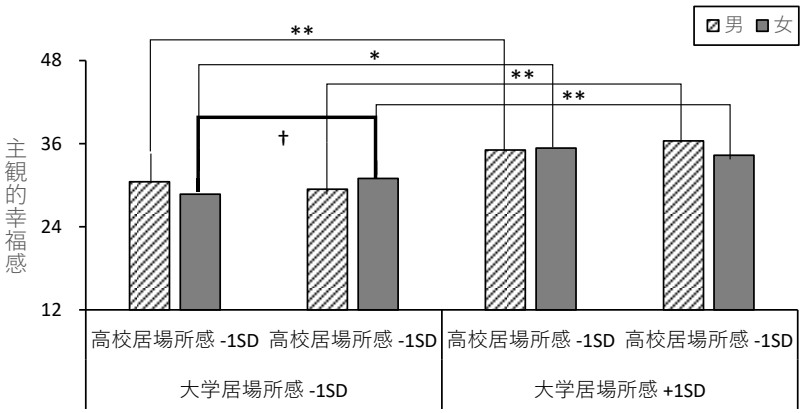

Figure 1　性別×高校居場所感×大学居場所感の単純傾斜分析

** p<.01 * p<.05 † p<.1

なお、仮説 2 の検討とは関連のない性別×学年×高校居場所感の交互作用に関しては、女性に限り、高学年よりも低学年の大学生において高校居場所感が低い場合に主観的幸福感が低いという関係がみられていた。

対人適応感に関する階層的重回帰分析では、性別×学年×大学居場所感の交互作用が有意となった。仮説 2 の検証とは関連のない結果であるが、概観すると、低学年の男性では大学居場所感の高低により対人適応感が異なり、大学居場所感の高い男性のほうが対人適応感は高かった。また、大学居場所感が低い男性の間では、低学年よりも高学年の男性のほうが対人適応感は高かった。そして、低学年の大学居場所感が高い人々には性差があり、男性のほうが相対的に対人適応感は高かった。

なお、対人適応感に関する階層的重回帰分析では、仮説 2 とかかわる交互作用として、性別×高校居場所感×大学居場所感の交互作用が有意傾向となった（β=.14, p<.1）。推定平均値のパターンを確認したところ、前述の主観的幸福感と同様に、女性に限り、大学居場所感が低い場合でも高校居場所感が高ければ（M=14.8）、大学と高校の居場所感が両方とも低い場合（M=12.5）と比べ、対人適応感の推定平均値が高くなる傾向がみられた。

自他尊重感に関する階層的重回帰分析では、高校居場所感×大学居場所感の交互作用が有意となった。単純傾斜分析の結果、Figure 2 に示したように、大学居場所感が低い場合でも高校居場所感が高ければ、大学と高校の居場所感が両方とも低い場合と比べ、自他尊重感が高くなる傾向がみられた。これは仮説 2 を支持する結果であった。

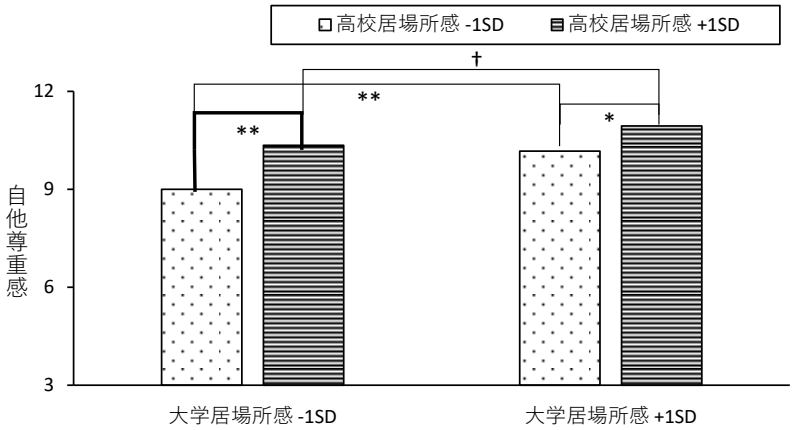

Figure 2　高校居場所感×大学居場所感の単純傾斜分析

** p<.01　* p<.05　† p<.1

以上の結果をまとめると、仮説 1 はすべての従属変数の分析結果で支持され、仮説 2 は自他尊重感の分析結果から支持され、主観的幸福感の分析結果から女性に限定して指示された。したがって、大学生が大学での対人関係において居場所があると感じることができてれいば主観的な幸福感や現状への適応感をおぼえやすいこと、また、大学での居場所感が低い場合でも別の同世代の対人関係である高校での居場所感があったと認識できていれば主観的幸福感や適応感があると思いやすいことが示されたといえる。

ただし、本調査のデータにはいくつかの問題点がある。まず、性別と学年の間に弱い正の相関がみられるため、重回帰分析において多重共線性の影響はみられなかったものの、結果を解釈するにあたり､性別の影響なのか学年の影響なのかが明確にしがたい点である。そして、学年に関しても回答者の居住地域との交絡があり、低学年は北陸・中部地方の大学生が占め、学年が上がるにつれて関東・東北地方の大学生が回答しているという偏りがあるデータであった。地域の影響が除去できない理由として、調査時期の 2021 年 10 月に、石川県の大学では対面授業が全面的に実施されていた一方、関東圏の 3 ヶ所の大学では遠隔授業が続いていたり、科目によって対面授業と遠隔授業が使い分けられているハイブリッド形式をとっていたりしたことも挙げられる。

そこで、調査対象者をある地域の大学生に限定して仮説 1 と仮説 2 を支持する結果が再現されるかを確認するために、調査 2 を実施した。

調査 2

方法

調査対象者と調査時期　石川県内の 4 年制大学 1 カ所において、心理学関連の授業（複数）の受講学生へ Web 調査への参加協力を依頼した。調査 1 と同様に、調査への参加は自由意思に基づくことや参加しないことによる不利益はないことを口頭で説明し、Web 調査の冒頭と最後にも文章で明示していた。依頼している授業により、2022 年 6 月 24 日～30 日、あるいは、2022 年 7 月 6 日～14 日の期間を調査期間とし、97 名の参加協力が得られた。

調査項目　基本的な調査項目および順序は調査 1 と同じであった。

調査 1 と異なる内容として、デモグラフィック変数のうち現住所の都道府県に替わり「居住形態」を尋ねた。回答選択肢は「家族と同居」、「一人暮らし」、「寮生活」、「その他」の 4 つとし、該当する 1 つを選択するよう求めた。

結果と考察

分析対象者　Web 調査への参加者 97 名のうちデータの使用許諾が得られた 95 名が分析対象者となった。性別の内訳は、男性 62 名（65.3%）、女性 33 名（34.7%）であった。平均年齢は 19.7 歳（*SD*=1.16）となり、学年分布は大学 1 年生が 27 名（28.4%）、2 年生が 14 名（14.7%）、3 年生が 39 名(41.4%)、4 年生が 15 名(15.8%)となった。なお、学年によって性別の偏りがみられ、1 年生は女性の割合が相対的に多く（16 名, 27 名の 59.3%）、3 年生は男性の割合が相対的に多かった（30 名, 39 名の 76.9%）。居住形態に関しては「家族と同居」が 65 名（68.4%）と最多で、次いで「一人暮らし」22 名（23.2%）となった。

各変数の特徴　2 種類の居場所感尺度について、調査 1 と同様に 1 因子構造であることが確認できた。また、主観的幸福感尺度も 1 因子構造であることが確認でき、適応感を測定するための 9 項目も調査 1 と同様の 2 因子構造であることが確認できた。よって、これらの変数については調査 1 と同様に得点化し、階層的重回帰分析に用いることとした。なお、階層的重回帰分析に用いる変数間の相関関係を確認したところ（Table 7）、調査 1 と同じく性別と学年の間に弱い相関がみられた。なお、調査 1 とは異なり性別と従属変数との間の相関はみられなかった。

Table 7

階層的重回帰分析に用いる各変数の相関

	1	2	3	4	5	6
1 性別(男性1,女性0)	—					
2 学年	.324 **	—				
3 高校居場所感	.141	.263 *	—			
4 大学居場所感	.005	.058	.494 **	—		
5 主観的幸福感	.109	.141	.380 **	.470 **	—	
6 対人適応感	.032	.154	.285 **	.276 **	.347 **	—
7 自他尊重感	-.018	.142	.395 **	.526 **	.347 **	.255 *

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .1$

階層的重回帰分析　調査 1 と同様に、高校居場所感と大学居場所感、および、性別（ダミー変数）、学年（連続変数）を説明変数として投入する階層的重回帰分析を実施した。重相関係数の変化量の有意性を基に分析結果を判断し、主観的幸福感は調査 1 と同様に step3 の結果を採用することにした。しかし、対人適応感と自他尊重感については重相関係数の変化量が有意にならなかったため、主効果のみの step1 の結果を用いることとした（Table 8）。

Table 8
階層的重回帰分析の結果

	主観的幸福感			対人適応感	自他尊重感
	step1	step2	step3	step1	step1
説明変数（主効果と交互作用項）	β	β	β	β	β
性別（男性=1，女性=0）	.066	.141	-.060	-.028	-.075
学年	.054	.046	.217 †	.108	.098
高校居場所感	.167	.151	.043	.169	.163
大学居場所感	.384 **	.412 **	.550 **	.187	.440 **
性別×学年		.273 **	.284 **		
性別×高校居場所感		.016	.142		
性別×大学居場所感		-.124	-.136		
学年×高校居場所感		-.068	-.111		
学年×大学居場所感		.127	.122		
高校居場所感×大学居場所感		.027	-.138		
性別×学年×高校居場所感			.019		
性別×学年×大学居場所感			-.115		
性別×高校居場所感×大学居場所感			.356 *		
学年×高校居場所感×大学居場所感			-.302 *		
R^2	.259 **	.339 **	.418 **	.115 *	.311 **
ΔR^2		.080	.080 *		

** p<.01 * p<.05 † p<.1

調査 1 と同様に、主観的幸福感と自他尊重感の 2 変数に関する分析では大学居場所感の主効果が有意になった。しかし、対人適応感に関する分析では大学居場所感の主効果は有意にならなかった。したがって、調査 2 では主観的幸福感と自他尊重感の 2 変数についてのみ、仮説 1 が支持された。

交互作用の検討ができる唯一の従属変数となった主観的幸福感に関して、調査 1 と同様に性別×高校居場所感×大学居場所感の交互作用が有意となった。しかし、単純傾斜検定を実施すると（Figure 3）、調査 1 ではみられていた「大学居場所感が低い場合でも高校居場所感が高ければ主観的幸福感の推定平均値が高くなる」という結果は再現されなかった。したがって、仮説 2 は支持されなかった。

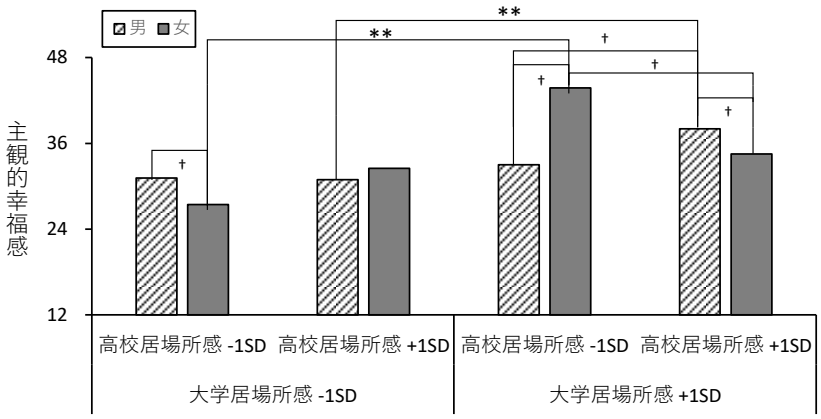

Figure 3　性別×高校居場所感×大学居場所感の単純傾斜分析

なお、主観的幸福感を従属変数とする階層的重回帰分析では、学年×高校居場所感×大学居場所感の交互作用も有意となった。性別と学年の間に有意な正の弱い相関があったものの、この交互作用における推定平均のパターン（Figure 4）と、Figure3 に示した性別×高校居場所感×大学居場所感の交互作用の推定平均のパターンは、一致しているとはいいがたい結果となっていた。よって、主観的幸福感に対する性別と学年の影響は交絡していないものと判断できる。なお、主観的幸福感を従属変数とする階層的重回帰分析では、性別×学年の 1 次の交互作用が有意となっており、単純傾斜分析を行うと、低学年においては男性(M=30.5)よりも女性(M=34.5)のほうが主観的幸福感の推定平均が高くなり、男性に限って高学年(M=36.1)のほうが低学年よりも主観的幸福感の推定平均が高いという結果がみられていた。

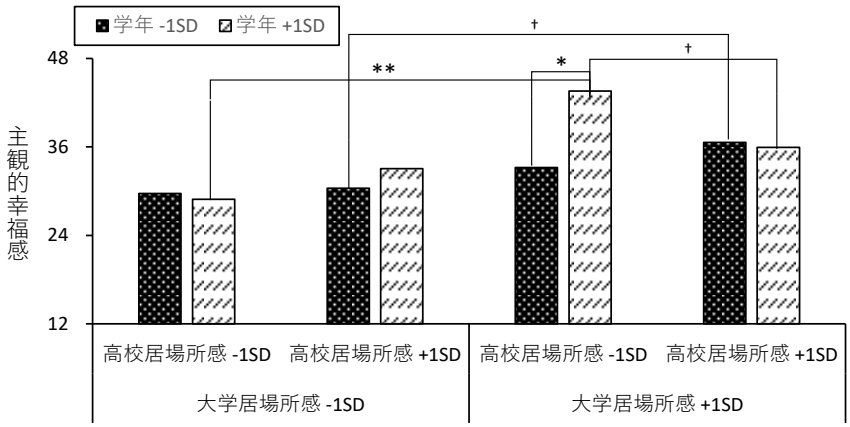

Figure 4　学年×高校居場所感×大学居場所感の単純傾斜分析

** p<.01　* p<.05　† p<.1

Figure 3 と同様に Figure 4 においても、調査 1 ではみられていた「大学居場所感が低くても高校居場所感が高ければ、主観的幸福感が高くなる」という結果は再現されなかった。よって、仮説 2 は支持されなかった。

全体考察

2 つの調査の結果から、仮説 1「大学での居場所感が高い者は、居場所感が低い者に比べ、主観的幸福感および適応感が高いだろう」は支持されたと考える。特に、主観的幸福感に関しては 2 つの調査データで安定して、大学居場所感の主効果の標準偏回帰係数が中程度の値を示したことから、大学での対人関係において自分自身の居場所を感じることができることが、大学生にとって幸せを感じる大きな基盤の 1 つとなり得ることが考えられる。ただし、調査 1 では測定していなかったが、調査 2 で測定した居住形態において、回答者の大部分は家族と同居していたため、例えば、家族の中に居場所を感じられることが主観的幸福感に寄与しているといったことも考えられるだろう。したがって、大学での居場所感のみが主観的幸福感に寄与すると短絡的に考えることはできない。本研究の 2 つの調査では扱わなかったが、大学生が自分の居場所として重視している対人関係が何であるのか、大学は彼らの居場所として重要視されているかどうか、といった側面も踏まえた再検討が必要であろう。

一方、仮説 2「大学での居場所が低い者であっても、高校での居場所が高かった場合には、主観的幸福感および適応感が高くなるだろう」については、調査 1 では支持する結果がみられたのに対し、調査 2 で仮説 2 を支持する結果はみられなかった。この点については、調査時期、ひいては、回答者の大学生が過ごしていた高校生活や大学生活の質が影響していた可能性が考えられる。調査 1 を実施した 2021 年 10 月の時点では、全面的に対面授業を再開していた大学もあれば、遠隔授業を基本とする学びを続けていた大学もあった。前者であれば授業以外のさまざまな活動も大学で直接、友人との交流が可能であった一方、後者の場合には友人との直接交流は難しい状況であったと思われる。対して、調査 2 を実施した大学では、2022 年 6 月～7 月の時点で COVID-19 発生前とほぼ同等の対面授業を行っていた。そして、調査 2 に参加した回答者の中には、大学生活ではなくむしろ高校生活において COVID-19 の影響を受け、高校での居場所感がうまく醸成できなかった人も含まれていた可能性も考えられる。仮説 2 で示している事柄が COVID-19 の影響で通常の大学生活を送ることが難しかった時期に一時的に成立したことなのか、それとも、通常の高校生活や大学生活を再び送ることができるようになってからも起こり得る現象であるのかについては、本研究のデータのみでは断言できず、継続的にデータを収集して分析する必要があるだろう。

なお、本研究で扱った高校居場所感や大学居場所感は、先行研究（石本, 2010；則定, 2016）とは異なり、複数の因子構造では構成されておらず、単一の因子構造であった。則定(2016)は心理的居場所感として、本来感、役割感、被受容感、そして安心感の 4 因子があるとしており、これは石本(2010)と対比すると、本来感、被受容感、安心感が「ありのままでいられること」にあたり、役割感が「役に立っていると思えること」に該当すると思われる。そして、本研究で測定した居場所感は、相対的に前者の本来感や被受容感、安心感に相当する内容であったと思われる。よって、大学生の主観的幸福感に影響を及ぼす居場所感は「ありのままの自分でいられる」大学や高校での対人関係であった可能性が高いが、一方で、「大学や高校の対人関係において自分が役に立っていると思えること」が主観的幸福感や適応感に影響を及ぼしているかどうかは、本研究のデータからは確認することができな

い。そのため、先行研究で用いられている居場所感尺度を使用した再検討も必要になるであろう。

さらに、本研究では居場所感が主観的幸福感や適応感に及ぼす影響を検討したが、大学生の主観的幸福感や適応感が高いことや低いことが彼らの生活にどのような役割を果たしているかまでは検討できていない。周囲の人物との対人関係の中で自分の居場所があると感じられることが、心理的な健康につながるだけでなく、具体的な日常行動に及ぼす影響についても検討する必要があるだろう。

引用文献

学校不適応対策調査研究協力者会議（1992）. 登校拒否（不登校）問題について―児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して―　文部省初等中等教育局

平石 賢二（1990）. 青年期における自己意識の構造―自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康―　教育心理学研究，*38*，320-329.

石本 雄真（2010）. 青年期の居場所感が心理的適応，学校適応に与える影響　発達心理学研究，*21*，278-286.

伊藤 美奈子・栗本 美百合・白水 倫生（2021）. コロナ禍による大学生のストレスと大学生活への意識　人間文化総合科学研究科年報（奈良女子大学大学院），*36*，25-37.

伊藤 裕子・相良 順子・池田 政子・川浦 康至（2003）. 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　心理学研究，*74*，276-281.

則定 百合子（2016）. 青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する研究　風間書房

注

[1] 調査 1 は，2021 年度に埼玉学園大学人間学部人間文化学科を卒業した根本拓海氏が，卒業論文作成のために筆者の指導のもと実施した調査データを用いている。卒業論文作成に使用したデータについて，再分析と再構成を許可いただいた根本氏に感謝します。